

〈要約〉

ホッブスによる欲望の合理化

Rationalization of appetites by Hobbes

篠原 隆
Takashi shinohara

『啓蒙の弁証法』の著者たちによれば、狩猟採集生活から農耕定住生活への移行には、大きな飛躍があった。自然の豊穡な恵みの恩恵に埋没する誘惑を振り切って、過酷な労働と支配の世界に入ることは、連続的な発展ではなく何らかの強い意志が働いていたはずだと。啓蒙の弁証法はそこにすでに近代的な啓蒙的理性（世界の合理化）が働いていることを見て取った。彼らに先立って、自然状態から文明状態への移行過程に近代のコモン・ウェルス（国家）成立根拠を求め、近代国家論の基礎づけをしたのがホッブスであった。国家の本質は死への恐怖であり、その情念が生の欲望の合理的追求を可能にしており、そのままではお互いに死に至らしめるすべての者が持つ権力への意志が、相互の力の承認による相互支配という抑制によって、つまり力の財貨による等価交換によって生み出される市場の流通性によって合理的に貫徹されることを明らかにした。